

2018 年度前期 授業改善アンケート集計結果に対するコメント

—文芸学部—

文芸学部長 村瀬 鋼

今回の授業改善アンケートは、従来の「授業評価アンケート」からこの形態に移行して初めてのアンケートである。本学部については 345 科目（内、実施必須科目は 204 科目）を実施対象科目として 323 科目（内、必須科目 201 科目）から回答が得られ、実施率は 93.6%であった。昨年度前期の授業評価アンケート（347 対象科目中 327 科目の実施で、実施率 94.2%）を若干下回る実施率とはなったが、大学全体の実施率（994 対象科目中 903 科目の実施で、実施率 90.8%）と比べても、満足してよい数値と言ってよいだろう。

さて、集計結果についてであるが、まず、授業の質に関わる設問 3 から 11 に関しては、全て 4 点以上の値となっており、大学全体の平均値と比べても、他の三学部と比べても、はっきりと高い数値となっている。そこから、文芸学部では、個々の科目については即断できないものの、全体としては総じて十分に良質な授業を提供できていると見てよさそうに思われる。但し、昨年度前期の授業評価アンケートと並べて、形態は変わったものの概ね相当する設問同士を比較してみると、多くの数値が若干低下している。例えば、2017 年度前期の設問 12「総合的にこの授業を評価できる」4.44 に対して、今回の設問 10「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」4.28、同様に昨年度前期の設問 9「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」4.12 に対して、今回の同じ文言の設問 7 は 4.01、また昨年度前期の設問 13「教員の板書、スライド等の文字は読みやすかった」4.29 に対して、今回の設問 11「教員の板書、スライドは見やすかった」は 4.17 である。アンケートの形態や文言が変更されていることもあり、数値の低下をそのままのものとして受け取るべきでもないと思われるが、われわれとしては、こうした数値を参考にして、現状に満足することなく、いっそうの授業改善に努めるべきであろう。

次に、受講者の授業への参加度に関わる設問 1、2、12 に関して見ると、授業回数についての設問 1 の 3.95（平均して、アンケート回答時まで 2 回程度の欠席に当たると思われる）は、まあそんなものかなという感じであるが、授業時間外の予習復習の時間数に関する設問 12 の結果（2.58、ということは、平均して 0.5 時間程度の見当か）は、たんなる怠業とは違って勉学に割く時間の余裕がないように見える昨今の学生たちの多忙さをも考えれば、ことさら意外ではない数値ではあるものの、大学での学習の本来要求されているあり方に鑑みるなら、憂うべき数値だと言わざるをえない。また、授業に傾けた努力の多寡を訊ねる設問 2「授業中、この授業の内容を理解するために努力した（ノートをとる等）」が、昨年度前期の同様の設問 2「授業中意欲的に取り組んだ（ノートをとる等）」の 4.24 に比して低下し、4.01 となっている点も気にかかる点である。われわれとしては、たんに宿題や課題を課すということにとどまらず、学生たちが授業時間内外によりいっそう主体的・能動的に学習するよう、学生たちの関心や意欲を強く喚起しうる授業を工夫して展

開する必要があるように思われる。

以上、今回のアンケート結果から判断するに、本学部の授業運営は総じて良好に行われていると言えそうではあるものの、いくつかの設問の数値には、特に学生たちの学習意欲の喚起という点において、いっそうの授業改善が望まれることが示唆されていると思われる。

以上